

# 平成31年度（令和元年度） 学校評価表

品川区立荏原第五中学校

校長

加藤 敏

荏原第五中学校校区教育協働委員会

委員長

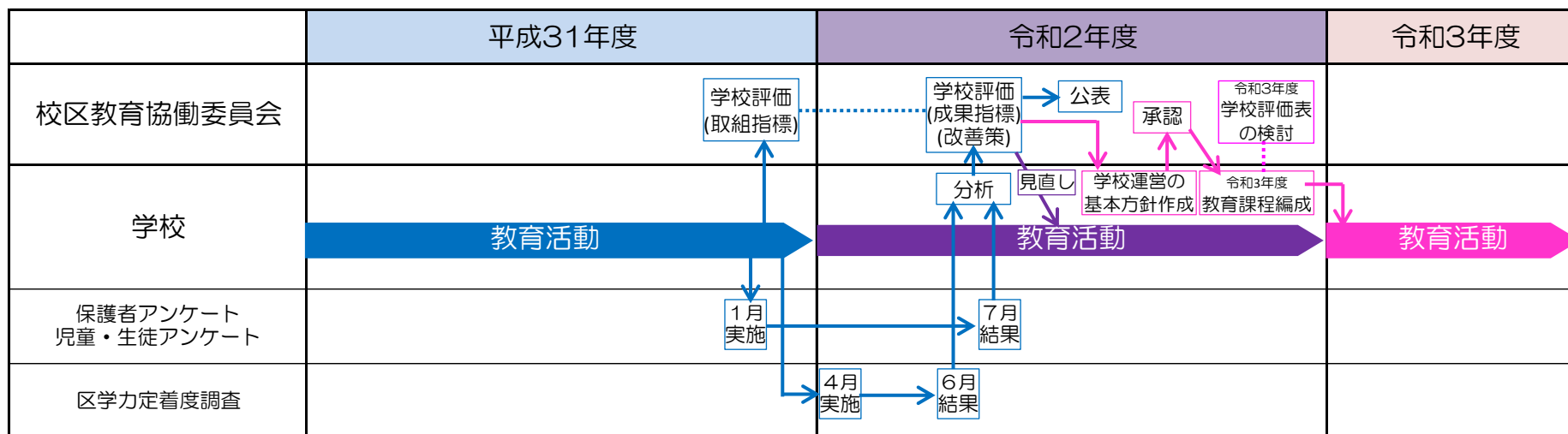
谷田部 玲生

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正 平成31年3月28日教育長決定要綱第8号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

- (1) 学力に関すること。
- (2) 人間性や社会性に関すること。
- (3) 体力・健康に関すること。
- (4) いじめ防止の取組に関すること。
- (5) 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※平成31年度の学校評価が令和2年度および令和3年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



評価項目1 学力に関すること

重点目標		○義務教育9年間の全教育活動を通して、①基礎的・基本的な知識や技能の習得、②習得した知識や技能を活用する思考力、表現力、問題解決力、③生涯にわたって学び続ける意欲や態度、の定着と向上に努める。 ・旗台、源氏前各小学校と「自ら学び、自ら行動する児童・生徒の育成」を研究テーマに、教科指導等の工夫・改善を図る。 ・基礎・基本の定着のため、朝のステップ学習や地域未来塾等を活用するとともに、確認テストを計画的に行う。 ・学習規律の確立と家庭学習の習慣化により主体的に学習に取り組む姿勢を育成する。		
評価指標	最上段：成果指標	最上段：成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降：取組指標	2段目以降：取組指標の達成状況の説明		
①	区学力定着度調査では、各教科の平均正答率が全国平均以上になる。	・各学年、各教科ともおおむね達成できている。 ・(数学)第7・8学年で学力を維持・向上するかが課題である。 ・(理科)全国平均を若干下回るが、昨年度より2・3ポイント上昇した。	B	・各種学力調査や実力テスト等の結果は、全国平均に比較して概ね満足な結果となっている。特に、目標値への達成率は良好な状態である。 ・一方、下位層の生徒も一定数おり、学力の二極化が課題となっている。 ・補習学習だけではなく、家庭学習の習慣化を図る上で、下位層の生徒には初めは個別に課題を与えるなどの工夫が必要である。 ・視覚刺激、聴覚刺激どちらにも通用する授業の工夫を図っていく。
	教師は、定期考査の平均点を65点に設定し、生徒が理解しやすい授業にするために授業改善に努めている。	・基礎的・基本的知識を定着させる場面と考えさせたり発表させたりする場면을計画的に授業内に設定するなど、授業改善への工夫に努めている。	B	
	朝ステップを3期に分け、国語・数学・英語を中心に確認テストを入れながら計画的に実施し、基礎・基本の定着を図っている。	・学習内容、確認テストなど計画的に生徒にも示しながら進めることができた。一部の消極的な生徒への対応を工夫する必要があった。	B	
	地域未来塾を活用しながら放課後自習室、サマースクールを計画的に実施し、自学自習の態度を育てている。	・地域未来塾の活用を生徒に呼びかけた。特に7年生で学習の遅れがちな生徒の参加を促すことで、意欲を引き出すことに効果的であった。	B	
②	落ち着いた学習環境・学習習慣により、平日1時間以上家庭学習する生徒が70%以上になる。	・「1日1時間以上学習するように心掛けている」と回答した生徒は全体で64%で、昨年より10ポイント上がった。	B	・第7・第8学年の時期から家庭学習を習慣化させるために、特に家庭の支援が厳しい生徒への働きかけを工夫する。 ・小中合同研究の中で、一貫性や系統性をもった教科指導方法をより検討・構築していく。 ・「宿題を提出しない」「放課後補習を避ける」「学力や宿題が足かせとなり不登校傾向となる」生徒の対応につて、スクールカウンセラーとも連携して特別支援教育の視点からアプローチを工夫する。
	小中合同研究会(教科中心)を年8回実施し、基礎・基本を生かして学びを深めるための授業改善に努めている。	・分科会で小中の単元のつながりを意識し、発達段階にあった基礎・基本を確認するなど、小中合同研究会を通して連携して話し合うことができた。	B	
	宿題は全員の提出を原則とし、生徒個々の特性を見極めながら放課後補習等で学習補助を行っている。	・全員の提出を目指してはいたが、徹底するまでには至らなかった。 ・放課後の補習だけで改善させるには限界があり、スモールステップで自学できる課題の工夫などが必要である。	C	
	自己肯定感の高揚を図るため、各種検定試験を奨励し、卒業時に50%の生徒に英検・漢検いずれか3級以上を取得させる。	・9年生の2学期終了時点で、英検3級以上の取得者は45%であった。 ・各種の検定試験への呼びかけが足りなかったように思う。	B	

評価項目2 人間性や社会性に関すること

重点目標		○人権尊重の精神を基盤として、人として社会生活を営む上で大切なことや守るべきことの知識や技術・技能を全教育活動を通して確実に身に付けさせる。 ・人権学習、キャリア学習、福祉・ボランティア学習に重点を置いた指導を計画的に市民科で行う。 ・教職員・生徒・保護者相互の信頼関係に基づく予防的生活指導、教育相談を実践する。 ・差別や偏見を許さない人権尊重教育を推進し、生徒の自治・自浄能力を高める指導を通して自己有用感の高揚を図る。		
評価指標	最上段：成果指標	最上段：成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降：取組指標	2段目以降：取組指標の達成状況の説明		
①	規則やきまりを守って落ち着いた学校生活を送っている生徒が100%になる。	・生徒アンケートから「心がけている」生徒の割合は92%である。昨年度より1ポイント上がっているが、各学年ともお互いに気を付けるような声掛け等はまだまだ弱い面が見られる。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・落ち着いた学校生活を送る生徒は増えていると感じるが、相手によって態度を変える生徒がいることは変わらず課題である。</li> <li>・学校行事には積極的に取り組んでいた。リーダーを育てるのが今後の課題である。</li> <li>・生徒間の意識の差が大きく、全体へ自然に実践させるには、市民科の道徳などをうまく活用していく必要がある。</li> </ul>
	学校行事や生徒会活動などを通して、意欲的に取り組む態度を育て、行動力・実践力を身に付けさせている。	・特に行事に対しては積極的に仕事に取り組む生徒が多く、行事を通しての成長を実感している。	A	
	挨拶、時間を守る、適切な言葉遣い、善悪の正しい判断など、自然に実践させている。	・チャイム着席はできている。丁寧な言葉遣い、善悪の判断は生徒間に差はあるがおおむね良好な状況である。また、家庭への啓発も必要である。	B	
②	自分の将来像について考えを深め、進路に対して目標を定め努力する生徒が9年生で90%以上になる。	・生徒アンケートから「目標を定めている」9年生の割合は79%である。7・8年生は10～30%ほど低い割合であることから、計画的・系統的な指導をさらに工夫していく。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・9年生の進学を考える時期だけで意識させるのではなく、入学当初から将来的な目標を考えさせ、地道に努力する生徒を育てることが課題である。</li> <li>・早い段階から家庭へも進学情報等を発信していく。</li> </ul>
	小学校段階からの系統的な市民科学習を通して、自分の進路に対して深く考えさせている。	・旗台小学校に加え、グループ内2小学校とも、市民科一貫プラン等を活用しながら、発達段階に応じた系統的なキャリア教育を実践していく。	B	
③	学校の施設・設備を大切に扱い、学習環境が良いと感じている生徒が100%になる。	・生徒アンケートから「施設・設備を大切に扱う」意識をもっている生徒は92%である。年間を通して故意による破損は見られない。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・清掃は行き届いている。わずかではあるが、器物破損が見られたが、大半の生徒が学校の施設を大切に扱うことはできていると感じる。</li> <li>・生徒への指導とともに、教員も日常的な施設・設備点検を意識し、率先して学習環境の整備・維持に努める。</li> </ul>
	公共物を大切にすることの意味をきちんと指導し、生徒同士でも相互に気を付け合える人間関係が作られている。	・助け合える人間関係は作られているが、悪ふざけ等の幼さは特に男子生徒に見られる場面がある。	B	
	破損の故意・過失に限らず、生徒が教職員に報告できる安定した人間関係を基に、修繕等に迅速に対応している。	・破損等があったときには、生徒が必ず報告してくる環境になっており、破損に対して素直な気持ちで謝罪することができる。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成



評価項目3 体力・健康に関すること

重点目標		○生涯にわたって運動に親しむ資質や能力、健康の保持増進のための実践力の育成を図りながら、自己の体力への認識を高めさせ、体力向上への取組を推進する。また、健康の保持増進に関する基本的な知識生活習慣を身に付けさせる。 ・品川スポーツライアルの種目やワンミニッツエクササイズを体育の授業や部活動の準備運動等に取り入れたり、長期休業中の課題として取り組ませることで、調整力・柔軟性・筋力の向上を図る。 ・保健室来室時に自己の生活習慣の問題点を考えさせ、内科的不調の主たる理由となる生活習慣の乱れを改善させる。		
評価指標	最上段：成果指標	最上段：成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降：取組指標	2段目以降：取組指標の達成状況の説明		
①	8・9年生の体力調査の結果が、東京都平均の下限5%以内とする。	・ほぼ東京都平均であるが、8年男子が都平均より-8%となっている。全体としては、特に柔軟性（長座体前屈）全身持久力（持久走）が課題となっている。	B	・1週間の中で体育の授業以外で体を動かす時間が3時間未満の生徒が3分の2を占めており、体力の二極化傾向が大きい。特に、女子の運動不足が課題となっており、生徒委員会活動による運動機会の提供とともに、体育授業内での補強運動などを工夫する必要がある。
	運動習慣の二極化の改善に向け、体育委員会による全校生徒が楽しみながら行える企画を立てさせ、意識化を図っている。	・体育委員の企画・運営したクラス対抗昼休みドッジボール大会を実施している。レクリエーションボールを使用し、ボールが当たってもいたくない工夫をして全員が楽しめるようにした。	B	
	ダンスの授業ではテクニカルアドバイザーを活用し、生徒の意欲、関心・興味を高めさせ、運動の楽しさを実感させている。	・3学期（1月）に7・8年生で実施した。習い事としてダンスを経験していたり、昨年までの授業を振り返り楽しみにしている生徒も複数おり、有効な取組となっている。	A	
②	う歯治療率が100%になる。	・う歯治療率は39%である。う歯のある生徒は全体の6分の1なので、未治療生徒は30人程度となっている。家庭への啓発をさらに工夫する。	B	・口腔内の健康については意識の高い生徒・保護者の割合が高い傾向にある。一方で、家庭の支援を期待できない生徒も一定数おり、生徒が自立的に自己の健康管理に意識をもてるような指導や働きかけをする必要がある。
	歯と口の健康ポスターや未治療者・保護者への治療勧告、給食後の歯磨き指導と学校歯科医による授業等を通して歯科保健への意識の向上を図っている。	・三者面談毎での再治療勧告、学校歯科医による授業（7年生）、歯と口の健康ポスターの取組、給食後の歯みがき週間（7・8年生）を実施した。歯みがき週間にあたっては、保健給食委員会による歯みがき指導を生徒に向けて実施した。	A	
③	内科的理由での保健室来室数の減少と共に、生活指導部会を活用して、SC・養護教諭等との連携を綿密にとり、相談体制の強化を図る。	・内科的理由での来室は、昨年度と比べ減少している。また、保健室に来室したことをきっかけに、SCにつなげられたケースも複数あった。SCとの情報交換で、必要に応じてアドバイス等を受けている。 ・保健室での生徒の様子については生活指導部会で情報を共有し、必要な対応について検討している。	A	・精神的な面で保健室へ来室する生徒が多くなっている。相談しやすい体制とともに、その前段階でのケアを担当や養護教諭、SC等との連携の中で行う必要がある。 ・人間関係作りに課題をもつ生徒の割合が高くなってきており、教育相談的な手法の修得が必要となってきている。校内研修等を工夫しながら、教職員の指導技術の向上も図っていく。
	保健室利用時に個別のチェックカードを記入させ、自己の生活習慣の問題点に気付かせている。	・内科的理由での来室者については個別のチェックカードの内容をもとに必ず養護教諭と話す時間を設け、体調と関連付けながら生活習慣についても振り返るようにしている。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目4 いじめの防止の取組に関すること

重点目標		○「いじめ」は絶対に許されない、許さないという共通認識の下、全教職員と保護者・地域とで一人一人の生徒の言動からいじめの兆候をつかみ、未然防止に努めるとともに、事実発生時には迅速な対応をとる。 ・市民科や各教科指導、行事等への取組から内心の醸成を図り、生命尊重の精神、自他を大切にする心、不正を許さない強い態度を育む。 ・差別や偏見を許さない人権尊重教育を推進し、生徒の自治・自浄能力を高める指導を通して自己有用感の高揚を図る。		
評価指標	最上段：成果指標	最上段：成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降：取組指標	2段目以降：取組指標の達成状況の説明		
①	「いじめ」は重大な人権侵害であるという意識を育て、発生件数をゼロに近づけるとともに、100%解決する。	・「いじめ」につながる小さな言動を見逃さず注意することができた。	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市民科一貫プランにより、連携小学校と共通認識に立ち系統的指導を積み重ねていく。</li> <li>・強い指導ではなく、良好な人間関係を基盤としながら、きちんと理屈を理解させる丁寧な指導を心掛ける。</li> <li>・生徒委員会活動なども活用して、生徒の自主性を育てていく。</li> </ul>
	生活アンケートや教育相談活動、校内巡回、ハーツなど外部機関との連携を通して「いじめ」の早期発見に努め、組織的な対応をしている。	・時間割に運営委員会・生活指導部会を設定し、学年・クラス・生徒の情報の交換を密に行なっている。 ・生活アンケートやデイリーライフを通して「いじめ」の早期発見に努めている。	A	
	人権標語、人権ポスター、お肉の情報館講話等の取組を通して、多様性を認め、あらゆる差別を認めない意識を育てている。	・年間指導計画にしたがって、計画的に実施する中で、意識の定着を図っている。	A	
②	人権問題に関して理解を深め、自らを律することができるようになったと感じる生徒を100%にする。	・生徒アンケートから「人権侵害行為をしないように心掛けている」生徒の割合は98%である。QUTテストの結果等を利用して、内心に屈託を抱えている生徒に丁寧に関わっていく。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学年ごとに迅速な対応を行っている。指導の経過等も学校全体で共有し、組織的な対応を意識した取組となっている。</li> <li>・否定的な回答をした生徒は5名にとどまるが、丁寧な見取りをしながら健全な人権感覚を育てていく。</li> </ul>
	学校は、いじめに対して組織的で迅速な対応をする体制をつくり、対応している。	・運営委員会・職員連絡会・生活指導部会で生徒の情報交換をしている。 ・生活指導部で各学年情報を共有し、組織で対応している。	A	
③	いじめをなくし、人間関係による不登校生徒をゼロに近づける。	・人間関係による不登校生徒はいない。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人間関係に起因する不登校生徒はいないが、その他の理由による不登校・登校しぶりが増加傾向にあり、生徒の背景を理解しながら適切な対応を心がけていく必要がある。</li> </ul>
	教師は各自の人権感覚を磨き、言語環境を意識しながら人権尊重教育を推進している。	・言語環境の意識が年度途中で希薄となった印象があり、繰り返し意識する働きかけが必要であった。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目5 特色ある教育活動に関すること

重点目標		<p>○小中一貫教育を五中グループで推進する。特に旗台・源氏前各小学校とは、義務教育9年間を通して「自ら学び、自ら行動する児童・生徒の育成」を目指し、生活規律を中心に各発達段階で身に付けさせる力を明らかにし、「主体性」「課題発見力」「コミュニケーション力」の育成に重点を置いて研究を進める。                      ・授業、行事、生徒会活動等を工夫し、生徒自らが考え判断し行動できる能力を身に付けさせる。                      ・体験活動を通して、自分の立場や役割を理解し、考えや思いを適切に表現できる能力を身に付けさせる。</p>		
評価指標	最上段：成果指標	最上段：成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降：取組指標	2段目以降：取組指標の達成状況の説明		
①	ボランティア活動に複数回参加したことの ある生徒の割合が80%以上になる。	・生徒アンケートから「参加したことがある」生徒の割合は86%である。学年間で若干の差異がみられることから、教員の働きかけも同一步調で行えるように意識する。	B	・マンネリ化しているといった指摘もあるが、長年生徒が関わりながら継続してきた活動がほとんどであることから、参加した生徒に満足感をもたせるような働きかけを意識していく。
	生徒委員会の活性化により、ボランティア活動への意識の強化を図っている。	・生徒会は目標値を設定して呼びかけ等を行っているので、教員も同じスタンスで働きかけをする必要がある。	B	
②	目的意識をもち、自立できたと感じる生徒の割合が85%以上になる。	・生徒アンケートから「目的意識をもっている」生徒の割合は79%である。行事等の実施後に、満足感を意識させるような働きかけを工夫することが必要である。	C	・教員主導の部分が多く、もう少し生徒たちが考える場を作る必要がある。 ・いつも同じ生徒がリーダーシップをとっているため、他の生徒も意欲的に参加できるような雰囲気を作る。
	市民科学習、学校行事、生徒会活動等を通して、意欲的に企画や立案、運営に関与させる工夫を行っている。	・運動会実行委員会では、運営・係活動を意欲的に行なえるように各種委員会委員長を各係長として配置し、中央協議会を中心に体育委員とともに実行委員の活動をさせた。	B	
③	中学校生活の中で、自分が心身ともに成長したと感じる生徒の割合が85%以上になる。	・生徒アンケートから「成長したと感じる」生徒の割合は83%である。事の大小にかかわらず、責任を果たさせる工夫とそれを認める働きかけが必要である。	B	・自己の長所を理解させ、発揮させる場面を意図的・計画的に設定・活用する工夫が必要である。 ・互いに認め合う生活環境を意識して創造していく。
	授業、行事、委員会活動等で発表、表現する場を意識的に取り入れ、寛容さと自信を身に付けさせる工夫を行っている。	・比較的表現をすることが好きな生徒は多い。若葉祭などはよい機会として機能している。授業内でも意図的に表現させる場面を工夫していく。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成